

7. 富田の水田開発

南部の水田は前野と呼ばれ、現在の富田団地まで富田の地主の田でした。今でも富田の方の田畑が多くあります。

北の台地には五社野の田畑（安威川水系で五社水路整備で開発された）が、多くありました。

五社水路は、安威川の一の堰から取水し太田・宮田・赤大路を経て西五百住・富田に至る水路です。

柳川地区は、高槻市の南西部に位置し、茨木市との市境のエリアです。

柳行李（やなぎこうり）の材料になる「コリヤナギ」の産地だったので「柳川」という川の名前や地名がつけましたが、今では柳はなく、桜の木が並んでいます。

高槻市の人口急増期に水田が新興住宅地になり、同世代の子育て世帯が多い地域となりました。平坦地ですので、自転車での移動もスムーズです。阪急総持寺駅、阪急富田駅まで徒歩 20 分ほどで、駅周辺に買い物施設がありますが、府道 133 号線にも買い物施設が多く並んでいます。

茨木市白川辺りは、昔「三島村」と呼ばれていました。この村の集落では農業の傍ら、副業として柳行李を作っている人がたくさんいました。

柳行李の歴史はとても古く、約 1200 年前には作られていました。奈良の正倉院御物には、現在とほとんど変わらない形の行李が残されているそうです。

その頃は、文箱・衣装入れ・小物入れとしてごく一部の上層階級の人々だけに使われていました。

江戸時代になると、大名から町人まで広く使われるようになりました。

行李の種類も、鎧櫃（よろいびつ）、陣笠（じんがさ）などは、武士が使い。小間物行李（＝小間物を行商する時）、薬屋行李（＝越中富山の薬売りが有名）、帖行李、などは、商人や一般の人々が使います。

裱（かみしも）行李、長尺（＝衣類の保管）など、目的に応じた形ものが作られました。

行李は、大名の参勤交代、商人の商い、庶民のお伊勢参りなどの時に、旅行道具入れとして使われました。

明治時代には、手にさげて歩くこうりカバンとして、大正時代にはバスケットとして、昭和時代には、戦時中は軍用行李や飯行李、戦後は買物籠としてたくさん作られ、その他にもいろいろな種類の物が作られて、人々の生活の中に入り込んで現在に至ります。

飯行李は、「軽くて、じょうぶ。ごはんにやさしい、しなやかな弁当箱」で通気性が良く、登山や釣り、ハイキングなど野外でのお弁当に最適です。